

## 俳句通信

特別作品25句 下鉢清子「口過ぎの」

特集 〈結社誌・同人誌編集長 20句競詠〉II

荒川英之(伊吹嶺)

荒木 甫(鳴)

伊東 肇(若葉)

岩永はるみ(春燈)

小川雪魚(森の座)

鎌田 俊(河)

木村有宏(鶴)

蔵多得三郎(燎)

佐藤明彦(童子)

成井 侃(対岸)

松尾まつを(青草)

松本英夫(阿吽)

三上隆太郎(門)

望月 周(百鳥)

望月とし江(澤)



## 【円熟作家12句】

豊長みのる「秋のこ糸」

小林輝子「青山」

福井貞子「藍の濃き」

## 【30句近詠】

有住洋子「昼」

●作品● 菅野孝夫・白岩敏秀・寺井谷子・本井 英・  
朝妻 力・西村和子・星野高士・加藤国彦・  
尾村勝彦・江中真弓・田湯 岬・奥坂まや・  
井上弘美・恩田佑布子・三浦亜紀子・  
尾池葉子ほか

防  
人  
の  
歌  
碑  
立  
つ  
丘<sup>お</sup>  
陵<sup>か</sup>  
の  
野  
分  
晴

横川はっこう

ゴルフ倶楽部に隣接した野趣豊かな町に住んでいる。コロナの自粛期間に入り、桜の散る頃に始めた向原の森公園を廻るウォーキングのルートにも穂芒が背丈ほどに伸び、季節の移ろいの早さは驚くほどだ。途中の金程万葉苑には大きな歌碑があり、武蔵の地から筑紫へと徴用された防人の歌と防人の夫を思いやる妻の歌の二首が刻まれている。林の切れ間からの遠富士や横浜・江の島方面の眺望に古代等国の兵士たちの長途の旅を思う。



## 百選の水湧く里や赤とんぼ

長島衣伊子

結婚して十年目に子供を授かり、それを機に川崎市から  
秦野市へと引っ越してきた。神奈川県内唯一の盆地である  
秦野市は、丹沢山地からの流れ込んだ豊富な地下水を蓄え  
ており、その水量は三億トンとも言われ、秦野盆地湧水郡と  
して全国名水百選に選ばれている。私の自宅の近くには源  
実朝公御首塚があり、丹沢や富士山をのぞむ四季折々の風  
景は、俳句の目を十分に楽しませてくれる。子育ての時期  
は自宅で句会を行い、県外からも多くの俳句の仲間が足を  
運んでくださった。秦野の豊かな自然の中での子育ての経  
験は私の詩心を大きくふくらませ、私にとって何よりの財  
産となった。今では「杜の花」の会員も百名を超え、遠方の  
句会も複数受け持つようになった。雨あがりの朝、富士に  
大きな虹が立った。今日も夢の一日が始まる。



## 石垣の上の兄より石榴受く

廣瀬直人

## 遅い柘榴

西日本の稲刈りは十月上旬に行はれるが、岡山市の東部では十一月下旬から十二月にかけて行はれる。夏に麦を収穫する為だ。この田圃の中を川幅四十メートル程の排水路が縦断しており、収穫前の田圃の中で釣竿を振るのは誠に気分が良い。

川沿いに農家の廃屋があり、崩れかけた生垣越しに収穫されないままの柘榴が土手道を通せんぼする様に覆い被さがっている。ここが良い釣りポイントである。

十一月中頃、いつもの様に竿を振るが昼までに一尾しか釣れ無かった。コンビニのおにぎりを食べたがお茶を忘れた。気がつくとも土壁のようにカサカサになった柘榴がぶら下がっている。ひび割れた口から覗く真赤な実がやけに生々しい。咄囂にもぎ取り赤い実を頬張った。初めて柘榴が旨いと思った。

放置された柘榴だが、気になって辺りを見回すと重い桶穂が変わず静かに広がっていた。午後は久しぶりに良い釣りが出来、穏やかな一日となった。

絵・文 杉原武弘



## 特集

# 結社誌 同人誌 編集長 20句競詠(Ⅱ)

俳句結社誌、同人誌編集長の20句競詠です。  
今回も15人の編集長に参加していただきました。

---

|             |            |             |
|-------------|------------|-------------|
| 荒川 英之 (伊吹嶺) | 鎌田 俊 (河)   | 松尾 まつを (青草) |
| 荒木 甫 (鵜)    | 木村 有宏 (鶴)  | 松本 英夫 (阿吽)  |
| 伊東 肇 (若葉)   | 蔵多 得三郎 (燎) | 三上 隆太郎 (門)  |
| 岩永はるみ (春燈)  | 佐藤 明彦 (童子) | 望月 周 (百鳥)   |
| 小川 雪魚 (森の座) | 成井 侃 (対岸)  | 望月 とし江 (澤)  |

---